

プロタゴラス説の自己論駁性

—— プラトン『テアイテトス』169-171 ——

大内 和正

Kazumasa ŌUCHI

ある説や主張を論駁しようとするとき、それが真偽の区別を認めず、知識の可能性を否定するような性格のものである場合には、論駁はきわめて困難なものとなる。「万物の尺度は人間である」「各人に思われることは、そう思われる人にとって、事実またそのようにある」¹⁾というプロタゴラス説は、まさにそのような性格を持つものであった。『テアイテトス』(169-171)において、プラトンはこの説を論駁するために、その説自体が自らの立場を破壊してしまうことを示すという戦略を採ったのである。この論駁で用いられたのが自己論駁性を指摘する議論であることは、周知の事柄であるが²⁾、この論駁の有効性をめぐって、今なお活発な論議がなされており、解釈者たちの間で一致した見解は得られていない。

論議的となっているのは特に次の問題である。—— プロタゴラスは、各人の思いが真であるという自説に固執するならば、自説を否定する人々の思いをも真であると承認しなければならず、その結果、自説が偽であることも承認せざるを得ない。これがプラトンの議論の骨子である。しかし、ここでは本来のプロタゴラス説に含まれている「そう思われる人にとって」という重要な限定句が欠けており、もしこのままで論駁が成立するというのがプラトンの真意であるとすると、この議論はプロタゴラス説の論駁としては無効ではないか。

本稿における私の立場は、この議論の論駁としての有効性を弁護するもので

¹⁾プロタゴラス説が導入されるとき、「思い」(δοξεῖν)の代わりに「現われ」(φαίνεσθαι)が用いられることがある。「思い」が「現われ」あるいは「感覚」(αἰσθάνεσθαι)を含み、それらと置き換えられうることについては、161d3, 166e1-167b1, 171e1-3, 178b5-7, 179c2-4などを参照。

²⁾περιτροπήと呼ばれている議論。セクストゥス(*Adversus Mathematicos* VII 389-390)はこの方法を、デモクリトスとプラトンがプロタゴラスに対抗するために用いたものだと言っている。『テアイテトス』(171a-c)において展開されている議論がこれを指すことは、一般に承認されている。

ある。プラトンがここで限定句を意図的に除去し、まさにそのことによってプロタゴラス説の自己論駁性を露呈させることができたと考える。本稿では、限定句が省略されているという事実焦点を当てながら、この議論がいかなる意味で有効な論駁であるのかを明らかにしていきたい。

I

はじめに、この議論にはどのような問題点があるのかを確認しておきたい。まず、一連の議論に目を向けることにしよう。プロタゴラスに対する論駁はおよそ次のような手順を踏んで行われている。

A プロローグ (169d–170e)

これから開始される議論の考察対象が、知の優劣は存在するか否かをめぐってこれまでに同意された事柄であるとの確認ののち、二つの立場が改めて提示される。一つは、「各人に思われることは、そう思われる人にとって、事実またそのようにある」(τὸ δοχοῦν ἕκαστῳ τοῦτο καὶ εἶναι ... ᾧ δοχεῖ, 170a3–4) というプロタゴラス説であり、もう一つは、これに反対し、「知とは真なる考えであり無知とは偽なる思いである」とするすべての人々の思いである。そして、これら二つの立場からそれぞれ、「人間の思いは常に真である」、「人間の思いは、ときには真であり、ときには偽である」という前提が導出され、「これら両方から、人間は、常に真を、ではなく真と偽の両方を思っていることが帰結することになるだろう」(170c4–5) と、これから行われる議論の帰着点が示唆される。

B 本論 (170e–171c)

実質的な論駁が開始される。プロタゴラス自身も多くの人も人間が尺度であると思わない場合 (1) と、彼だけそう思い、多くの人はそう思わない場合 (2) との、二通りの選択肢が挙げられる。

(1) を選ぶ場合、いかなる人にとってもプロタゴラス説は真ではないということが直ちに帰結する (170e7–171a1)。この選択肢は議論の形式を整えるだけのものであると解されるが、もちろんこれを選ぶ限りにおいて、論駁は成立することになる。

(2) を選ぶ場合の帰結として次の二つが示される。

(2-1) そう思わない人のほうがそう思う人よりも数が多いので、ちょうどそれだけプロタゴラス説が真であるよりも、真ではないことになる (171a1–a5)。ここでも論駁が成立するが、人数の多寡によって真偽を決めるというこの帰結は

重要なものだとは言えないであろう³⁾。

(2-2) プロタゴラスは、自説が偽だと思っている反対者の思いも真であると承認し、自分の思いが偽であると認めることになる。しかし、反対者は、自分たちの思いが偽であることを承認しない。ところがプロタゴラスはその人たちのそういう思いをも真であると同意する。従って、プロタゴラスの『真理』は、他の人にとっても、彼自身にとっても、真ではない(171a6-c7)。ここにおいて、プロタゴラス説がそれ自体によって覆されていることが示されたとされるわけである。

さて、議論は以上のように多岐にわたっているが、その要所となるのは、「きわめて巧みな」(χομψότατον⁴⁾, 171a6) 議論と呼ばれている(2-2)の部分であることは間違いない。さらに絞り込めば次の部分であろう。プラトンは、プロタゴラス説自体から次のような帰結が生ずることをソクラテスに語らせている。

「あの人[プロタゴラス]はというと、自分の思いについて反対のことを思っている人々が、彼は間違っていると考えているその思いを真であると承認することになるだろう、誰もがその通りあるものを思っているということに同意しているのだからね。… そうすると、あの人は自分の思いが偽であることを承認することになるのではないか、もし彼が間違っていると考えている人々の思いが真であることに同意しているとすれば。」(171a6-b2)

これらの言葉を整理すると次のようになるであろう。

- (1) プロタゴラス説によれば、各人の思いは真である。
- (2) しかし、ある人々はプロタゴラス説が偽であると思う。
- (3) 従って、プロタゴラス説が偽であるという思いは真であり、プロタゴラス説は偽である。

ところで、すでに触れたように、多くの解釈者たちはこの議論がプロタゴラス説の自己論駁性を示していないとする⁵⁾。その無効性を指摘する諸家の意見

³⁾ Cf. McDowell, 170.

⁴⁾ Cf. LSJ s.v. “χομψός” I.2. ‘subtle,’ ‘clever,’ ‘skilful in technique,’ and etc.

⁵⁾ このことを最初に指摘したのは Grote(ch.28, 137-8) である。その後しばらく時をおいて、Vlastos(xiv n.27), Runciman(16), Sayre(87-8), Maguire(135-136), Bostock(89-92) 等によって、同様の批判が繰り返されている。また、Lee(244-247) は彼らとは違う角度から論じている。—— プラトンはプロタゴラス説をそのまま受け取ると問答の営みは無意味になることを指摘している(161e-162a)にもかかわらず、その直後にまじめな対話を要求するプロタゴラスの代弁をしている(162d-e, 168b) —— こうした事実から、この議論をアイロニーの枠組みでなされたものと判定して考察を進める。

はほぼ一致している。すなわち、この議論では「～にとって」という重要な限定句が欠けているのである⁶⁾。そこで(1)から(3)にこの限定句を付けると次のようになる。

- (1') プロタゴラス説によれば、各人の思いはその人にとって真である。
- (2') しかし、ある人々はプロタゴラス説が偽であると思う。
- (3') 従って、プロタゴラス説が偽であるという思いは彼らにとって真であり、プロタゴラス説は彼らにとって偽である。

こうして限定句を補った場合には、この議論が自己論駁性を示すものだとはもはや言えない。なぜなら、(1')から(3')の反論がなされても、プロタゴラスには、なお自説を守る方法が残されているからである。すなわち、この反論で実際に明らかにされるのは、プロタゴラス説が「その反対者にとって」偽であるということだけであり、プロタゴラスは、「自説は他人にとって偽であるかもしれないが、自分にとっては真である」と言い返すことによって、この反論を免れることができるのである。結論として後に述べられる「プロタゴラスの『真理』は、誰にとっても真ではあり得ないことになるだろう、他の人だけでなくあのプロタゴラス自身にとっても」(171c5-7)という言葉は、直ちに導き出すことはできない。

実際になされている議論のように限定句がない場合には、プロタゴラス説は論駁されはするが、本来あるべき形のプロタゴラス説が俎上に載せられていないという決定的な再反論を免れ得ないであろう。他方、この議論に限定句を補って理解する場合にも、プロタゴラスにはなお再反論の余地が残されることになる。いずれにせよ、この議論は論駁として成功していないかのようである。

たしかに、この議論のうちには多くのアイロニーが看取されうるが、しかし、その事実をもってこの議論そのものをアイロニーと解することには、無理があるように思われる。私はプロタゴラス説が問答の営みを無意味にするとの指摘は、後述するように、自己論駁の議論の帰結を予告したものであると考える。他方、限定句が付加されていても、この論駁は有効であるとする立場をとる論者として、Burnyeat(39-59)、Tigner(366-9)、Waterlow(19-36)等を挙げることができる。私の立場もこの議論の有効性を弁護するものであるが、私はむしろプラトンが意図的に限定句を排除したと考える。なお、この論駁はプロタゴラス説を問答の営みを無効にする立場へと追い込むことによってなされたという本稿の基本的な路線は、藤澤令夫先生の研究講義(1982年度)から大きな示唆を受けて成ったものである。同様の解釈は、小池(17-19)においてもなされている。

⁶⁾テキストに即して言えば、少なくとも171a8の *συγχωρεῖ που ἀληθῆ εἶναι*, また171b6の *ὁμολογεῖ καὶ ταύτην ἀληθῆ τὴν δόξαν* においては、「彼ら[プロタゴラス説の反対論者]にとって」を本来補わなければならない。

II

この論駁の有効性をめぐって疑義が出されるのは、以上を見る限り、当然かもしれない。しかし、少なくともプラトン自身がこの論駁の有効性に疑いを持っているとは考えられないであろう。それは、プロタゴラス説批判が完了した後のテオドロスのまとめの言葉からも明らかである。

「[プロタゴラス説は] 他人の思いも権威あるものとするが、その他人の思いはあの人の説を決して真でないと考えていることが明らかになった、という点でもその説は押さえてやりこめられるのである。」(179b7-9)

われわれは、諸家の見解に与してこの論駁が不成功だと即断する前に、はたしてこの議論に限定句が必要であるのかどうか、また必要であるとすれば、プラトンは限定句を不注意に落としてしまったのか、それとも意図的に除去したのかを考えてみよう。

プロタゴラス説が最初に導入される場面(151e-152c)を見るかぎり、限定句は本来必要であると言うことができる。プロタゴラス説は、ものは各人から独立して「それ自体で」($\alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \epsilon\pi'\ \epsilon\alpha\upsilon\tau\omicron\upsilon$)何かであるのではなく、「誰かにとって」($\tau\iota\upsilon$)何かであるという立場を表明しており、この説によれば、各人の思いとその人にとってのものとのあり様とは完全に対応し、このことがすべての思いや現われの不可謬性を保証するのである。当たり前の話であるが、逆にもしその説が限定句を必要としないと考えるならば⁷⁾、そもそもプロタゴラス説が紹介されるいかなる場面でも、限定句が付加される必然性などなかったはずである。

むろん、文脈上限定句が必要不可欠ではない場面では、それは省略されうる⁸⁾。しかし、少なくともこの議論では、限定句は必要であろう。なぜなら、この議論において限定句が不要だったならば、論駁は実際行われている通りのものではあり得ず、少なくとももっと簡単に——たとば先の(1)~(3)で見たような内容が論じられるだけで——完了していたはずだからである。

事実、プラトンの限定句の取扱いは慎重である。この議論は読者に限定句の重要性を再確認させようとしていると言ってもよいかもしれない。というのは、この一連の議論には、意識的に本来のプロタゴラス説を扱おうとしていることを示す、際だった特徴が見られるからである。まず、「他のものを通じてではな

⁷⁾ 限定句がないのが本来の説であると考えられる場合、プロタゴラス説は「すべての思いは、事実そうあり、真である」という積極的な主張となる。Cf. Sextus, *Adversus Mathematicos* VII 390.

⁸⁾ プロタゴラス説の表現として限定句が正式につけられることもあるし(e.g. 158a6-7, 162c8-d1, 170a3-4, 177c7-8)、省略されることもある(e.g. 158a2, 158d3-4, 161c2-3)。

く、あの人[プロタゴラス]の言葉から、できるだけ簡潔な仕方、その同意を取り付けることにしよう」(169e7-170a1)という状況設定が行われ、はっきりと限定句をつけた「各人に思われることは、そう思われる人にとって、事実またそのようにある」(170a3-4)というプロタゴラス説が改めて提示されている。そして、議論の途中でもプロタゴラス本人が相手になっていることがしばしば確認される(e.g. 170a6, c2, e7)。特に、問題の箇所における議論は「きわめて巧みな」ものと特徴づけられ、議論がプロタゴラス本人の同意(ὁμολογεῖν)や承認(συγχωρεῖν)や書いたこと(171b7)に基づいて展開されていることが、異常とも思えるほどに強調されているのである。

従って、これらの事実からすれば、批判の要とも言える決定的に重要な場面で、プラトンが限定句を不注意に落としたなどとはとても考えられない。むしろ、諸家の見解とは反対に、プラトンは少なくとも限定句付きの本来のプロタゴラス説を念頭に置きつつ、ここでは限定句を意図的に除去したと考える方が自然であろう。

III

さて、もし以上の理解が動かしがたいとすれば、なぜプラトンはこの箇所限定句を意図的に除去したのであろうか。そして、この議論はいかなる仕方プロタゴラス説の自己論駁性を示しているのであろうか。これらの問題を明らかにするために、われわれは視野を『テアイテトス』第一部で展開されるプロタゴラス批判の全体へと広げることにはしたい。

プロタゴラス批判の全体は、(i) 批判序論(161b-165e)、(ii) プロタゴラスの弁明(165e-168c)、(iii) 批判本論(168c-179d)という三つの部分からなる。順を追って見ていこう。

まず(i)において、もし各自の現われや思いがそのものにとってそのまま真であれば、

- (1) あらゆるものの中に「知」(σοφία)の優劣がなくなり、人間の知は、豚、^{ひひ}狒狒、オタマジャクシと違わないことになる、
- (2) お互いに相手の思いや現われを吟味したり論駁を試みたりするという「問答の営み」(ἡ τοῦ διαλέγεσθαι πραγματεία)が冗長でうんざりする無駄話になってしまう、

ことが指摘される。これに対してプロタゴラス側から、一方では、俗衆を相手にした「説得目当てでまことしやかなものによる」(πιθανολογία τε καὶ εἰχόσι)議論が拒否され、他方では、「反論だけをこととするような仕方の」(ἀντιλογικῶς)議論が後に禁じられる。

次の(ii)においては、プロタゴラスの立場から、プロタゴラス説と知者の存在が両立することを示そうとする弁明が提出され、知者の再定義がなされる。すなわち、知者とは他人の現われや思いを「悪しきもの」(κακά)から「良きもの」(ἀγαθά)へと変化させる人である。さらに、議論の方法として、質問によって反論するという「問答」(διαλέγεσθαι)が奨励される。

そして(iii)においては、以上を承けて二通りの批判がなされる。第一の批判(169d-171d)として、われわれの扱っている自己論駁の議論がなされる。続いて、第二の批判(171d-172b, 177c-179b)として、プロタゴラス説が成立しない領域、すなわち「価値」「未来」の領域を指摘することによって、批判がなされる。たとえば、立法は国家にとって「有益なもの」(τὸ ὠφέλιμον)を目指して行われるが、しばしばこの目的は達成できないとされる。

さて、この批判の全体を見渡すとき、われわれの問題を解くいくつかの手がかりを得ることができる。まず注目すべきは、この批判全体においては一貫して知の問題が論点となっているという点であろう。プロタゴラス説と知の優劣や知者の存在とは両立するかどうかをめぐって議論は進行している。ところで、自己論駁の議論において、プラトンの最終的な目標が本来のプロタゴラス説の論駁にある以上、最初から限定句をつけた方がより効果的な論駁が可能ではある。しかし、はじめから「～にとって」という限定句を付けた場合、思いは各個人にとってのみ固有な思いとなり、その結果、知も各人に相対化され、知の問題は限りなく希薄になることは明らかであろう。意図的な限定句の除去は、あくまでプロタゴラス説を積極的な主張として扱って知の問題を活かせる枠組みを保つことを意図してなされたものだと解することができるのである。

他方、(ii)のプロタゴラスの弁明において、「価値」という領域が議論の場に持ち出されている点にも注目すべきであろう。そこでは、現われや思いにおける「真」と「偽」の区別が否定され、「良」と「悪」の区別という観点が導入されているのである。とすると、(iii)の段階において、プロタゴラス説に対して、それが真であるとか偽であるという仕方で批判しても、論駁相手が納得する有効な論駁とはならないのではなかろうか。われわれが通常了解している意味での真偽を前提として議論に持ち込まずに、プロタゴラス説を正当に論駁することは、まず不可能だと言ってよい。ここからわれわれはこのプロタゴラス説に対する攻撃になっているのが第二の批判であると推定できる。そこでは、まさに「価値」の領域でプロタゴラス説が成立しないことが示されているのである⁹⁾。

以上の考察をもとに、実際の議論はいかなる意味でプロタゴラス説の自己論駁性を示しているかを明らかにしていくことにする。

(ii)のプロタゴラスの弁明において、プロタゴラスは議論の方法について次

⁹⁾ 第二の批判の哲学的な意味の解明については、本稿では論じることができない。今後の課題としたい。

のように述べている。

「質問によって異議を唱えるという方法は…心ある者なら何よりもまず追い求めるべきである。ただし、それはこういうふうにやってもらいたい。つまり質問する場合に不正を働くなということである。…問答をする場合には、まじめに行い、問答相手に対して、彼が自分自身によってかそれ以前の交際によって見当違いしていた誤りだけを示してやり、これを正すことである。」(167d6-168a2)

自己論駁の議論は、プロタゴラスとその反対者との間で、プロタゴラス自身が注文したとおりの問答法によって行われている。そして、実際の議論のように限定句がなければ、論駁は一応成立する。しかし、これは本来のプロタゴラス説ではなく、直ちに再反論が行われるのは明らかであろう。われわれの考察が告げているのは、この議論では、プロタゴラスが反論できる余地を残すという仕方で、本来の限定句付きのプロタゴラス説がimplicitに提起され、実質的な論駁が行われているということであった。そして、プロタゴラスがこの議論で限定句を補うように要求する場合、論駁は完全に有効なものとなる。すなわち、限定句を補った彼の説によれば、人々は「各人にとっての真」しか主張できず、人々が個々に自分だけの思いを持っているにすぎないことになるのである。プロタゴラスが何かを主張するとしても、それは単なるモノローグであると言わなければならない。彼は問答法での議論を選んだにもかかわらず、逆に互いに相手の思いを吟味したり論駁を試みたりするという問答を拒否する立場にあることがここで暴露されるわけである。もしプロタゴラスがこの帰結の受け入れを拒み、再反論しようとしてみたところで無駄である。その時まさに、限定句を除去した実際の議論が発動し、「プロタゴラスの『真理』は…あのプロタゴラス自身にとっても真ではあり得ないことになるだろう」(171c5-7)という結論が告げられるのである。

われわれが取り組んできた議論の実質は、プラトンはプロタゴラス説を問答を無効にする窮地に追い込むことによって、その自己論駁性を露呈させたものと解されるが、それは次のようなソクラテスの言葉で締めくくられている。

「実際にもし[プロタゴラスが]すぐにこの場へ、地面から首まで頭を迫り出してくるとしたら、当然のことながら、私には馬鹿げたことを喋っているとって、あなたにはそんなことに同意しているとって、いろいろと反論し、首を引っ込めると急いで退散していくだろう。」(171d1-3)

プロタゴラスが出てきて反論し、すぐに引っ込むというこの描写は、さまざま

まな解釈を許してきた¹⁰⁾。これは、自己論駁の議論との関連で読まれるのが自然であろう。しかし、プロタゴラスがこの議論に不満の意を表明したもの¹¹⁾としてではなく、むしろ、この論駁を完結させるためのエピローグとして理解されるべきものである。——プロタゴラスには再反論の余地はもはやない。彼が再反論するために問答の現場に出てくるとしても、せいぜい首までだけであって、全体が出てくるのではなく、しかも予想されるようにいろいろと反論しても、すぐに立ち去らざるを得ないのである。

ところで、第一の批判と第二の批判を通じて示されているのは、「すべての人の思いがすべて真であるというようなことはない」(179c2)ということである。プロタゴラス説が含み持つすべてのアポリアに決着がつけられたのではない。

「しかし、各人が現に持っている情態については、そこから感覚とこの感覚に基づく思いも生じるのだが、これら感覚や思いを真ではないとして取り押さえることは、もっと困難なことである。…これらのものは、ひょっとしたら、難攻不落のものなのかもしれない。」(179c2-4)

「現在」に関わる個々の感覚や思いが虚偽である可能性については、まだ少しも明らかにされず、むしろそれは難攻不落の防壁として残されているのである。この防壁に対する攻撃は、『テアイテトス』に続く対話篇『ソピステス』に持ち越され、対ソフィスト戦の総括という文脈の中で、「現在」に関わる「言明」(λόγος)の虚偽を立証するという仕方では、完遂されることになるのである¹²⁾。

(京都大学文学部・研修員)

参照文献

- [1] Bostock, D., *Plato's Theaetetus*, Oxford, 1988.
- [2] Burnyeat, M.F., 'Protagoras and Self-Refutation in Plato's *Theaetetus*,' *The Philosophical Review* 85(1976), 172-195, and in S. Everson (ed.), *Companions to ancient thought 1: Epistemology*, Cambridge, 1990. 本稿でのページの言及は後者による。
- [3] Ford, A., 'Protagoras' Head: Interpreting Philosophic Fragments in *Theaetetus*,' *American Journal of Philology* 115(1994), 199-218.

¹⁰⁾ 諸解釈の紹介と検討は、Burnyeat(56 n.22) および Ford(199-218) に詳しい。

¹¹⁾ E.g. McDowell(171). Waterlow(28-29) は、この解釈に批判を加え、この描写を含む関連箇所(171c9-d3)のテキストの分析と再構成を行っている。参照されたい。

¹²⁾ このことについては、拙論を参照されたい。

- [4] Grote, G., *Plato and the Other Companions of Sokrates*, vol.3, London, 1875.
- [5] Lee, E.N., ‘Hoist with His Own Petard’: Ironic and Comic Elements in Plato’s Critique of Protagoras(*Tht.* 161–171),’ in E.N.Lee et al.(eds.), *Exegesis and Argument*, Assen, 1973, 225–261.
- [6] Maguire, J.P., ‘Protagoras — or Plato?,’ *Phronesis* 18(1973), 115–138.
- [7] McDowell, J., *Plato: Theaetetus*, Oxford, 1973.
- [8] Runciman, W.G., *Plato’s Later Epistemology*, Cambridge, 1962.
- [9] Sayre, K.M., *Plato’s Analytic Method*, Chicago/London, 1969.
- [10] Tigner, S.S., ‘The ‘Exquisite’ Argument at *Tht.* 171a,’ *Mnemosyne* 24(1971), 366–369.
- [11] Vlastos, G., *Plato Protagoras*, New York, 1956.
- [12] Waterlow, S., ‘Protagoras and Inconsistency: *Theaetetus* 171a6–c7,’ *Archiv für Geschichte der Philosophie* 59(1977), 19–36.
- [13] 小池澄夫, 「オナル・スキアース」『理想』636(1987), 12–21.
- [14] 大内和正, 「虚偽の言明と現われ—— プラトン『ソピステス』263再考 ——」『古代哲学研究』25(1993), 35–43.